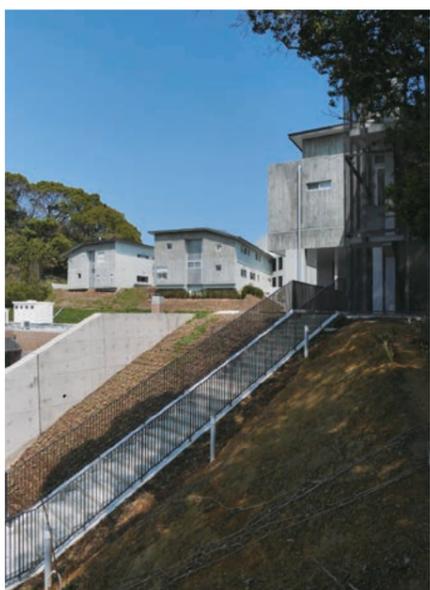




鳥瞰。奥に広がる建物は既存の施設。敷地は10m以上の高低差を持つ。



南西側全景。大地の激しい起伏を建築化する。



エントランスからの全景。棟を分け、スキマに緑と光を導く。



八幡厚生病院本館

選評

多様化する現代社会において、心の病などの増加により精神科医療の果たす役割が高まりつつある。一方で精神科病院は、かつての隔離、収容型で入院中心の治療からの転換が求められている。八幡厚生病院本館は精神科病院の建築計画において、これまでの考え方を一新するような病院建築を目指している。それは、機能や管理面などの効率性がとかく優先されがちな病院というビルディングタイプにおいて、患者が自力で自らを立て直すことのできる環境をいかに建築で構築できるかというテーマに、設計者が真剣に向き合った結果である。その設計者の思いに対し、病院の企画、運用管理側の理解と信頼、そしてそれを厳しい敷地条件下で建設した施工者の努力があつてこそ、達成できた建築である。

配置は、一〇以上の高低差を持つ難しい敷地において、傾斜地を見事に取り込んだ設計解と言えらる。分節された細長い棟が傾斜に直交する建物構成は、一見複雑には見えるものの、管理部門を中核にまとめた理にかなったゾーニングである。分節された各棟の長手方向に並ぶ病室には自然採光、自然通風と共に目に入る新鮮な緑の景色により快適な日常生活の場が確保されている。病室にいたる廊下は、あたかも街の街路を散策するような雰囲気として扱われている。この病院建築の持つ住宅の延長のような心地よい環境は、自らの病の克服に貢献することに違いない。

しかし特に記すべきは、この提案が指名プロポーザルによる案のなかでは最も施工が困難と思われる敷地利用計画であつたにもかかわらず、建築主がこの案を選択し実施に至つたことである。西側既存道路と既存病棟に近接する平場での建設が経済効率上は妥当であつたなかで、病院建築の固定概念を覆すような、傾斜地利用の本案の特徴を十分に理解した上での建築主の決断であつたと言える。またこれは、近年新設された東側大

BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計・施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。この賞は、1960年にはじまり2016年で57回を数えます。

< 2016年 第57回 BCS賞受賞作品 > 飯野ビルディング 大手町タワー／大手町の森 京都国立博物館 平成知新館 グランフロント大阪 高志の国文学館 サ・リッツ・カールトン京都 住田町役場 東京スクエアガーデン 流山市立おおたかの森小・中学校、おおたかの森センター、こども図書館 日清食品グループ the WAVE 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 八幡厚生病院本館 山梨学院大学国際リベラルアーツ学部棟 Ribbon Chapel 龍谷大学 和顔館 [特別賞] 札幌市北3条広場・札幌三井JPビルディング 日本橋室町東地区開発：室町東三井ビルディング、室町古河三井ビルディング、室町ちばぎん三井ビルディング、福徳神社

建築主

より 未来志向の精神科病院

八幡厚生病院は精神科の病院で北九州八幡区の丘陵地に位置しており、病院の横には小高い山があり、それを病院が囲っているように建てられています。精神科病院においては環境が治療にとって大変重要であり、当院は緑と山の自然環境を治療の一部として利用している都市型の病院です。

精神科病院は変革の時期であり、病院の機能分化が求められています。在院期間の更なる短

縮や長期在院者の退院促進のため、また社会のニーズに応えるため、治療構造上、機能分化が必要となります。今回の建物には今後の精神科医療のニーズに応える急性期、救急医療に特化した機能が加わり、病院全体も機能分化された病棟構成になっています。外来部門も明るい落ち着いた雰囲気であり、より機能的であり、病院の外来らしくない印象であることが特徴といえるでしょう。



翠会ヘルスケアグループ
代表
新貝憲利
Noritoshi Shingai



病棟の西北側外観。住宅の延長のような心地よい環境。

設計者

より



有限会社富永謙・
フォルムシステム
設計研究所
代表
富永 謙
Yuzuru Tominaga

緑や起伏といった「場所の力」が 生きる能力を呼び戻す

「ハードな病院施設としてではなく、普通に街で生活することの延長にある精神科病院はどのように創り得るだろうか」。プロポーザルに参加し、起伏のある自然に取り囲まれた緑の環境に当面し、病院の先生方やスタッフと打合せを重ねながら、7年間にわたる長い設計・監理の過程を通じて、一貫する私たちのテーマはこれでした。治療の機会としてだけでなく、自らの居場所があり、部屋の外に出ると街路が走り、

賑わいが感じられ、樹木の緑や、空の広さや光や天候の日常がそこに感じられるような、生活の場を保証してゆくことはしかし、一方で設計の仕事だと思えます。背中を支え、生きてゆく能力を自らの中に蘇らせる能力は〈場所の力〉の中に潜んでいると考えています。

そんな私たちに全幅の信頼を寄せていただいた建築主、そして困難な施工に取り組んだ施工者の方々に今は有難い！という気持ちです。

施工者

より 複雑な地形形状を克服して 建築主と設計者の想いを形に

敷地には10m以上の高低差があり、建物は5棟に分かれて敷地の起伏や形状に合わせてそれぞれ異なる角度で配置されているので、慎重に測量するとともに、綿密な仮設・工程計画を作成して敷地の奥から段階的に施工しました。また、コンクリート打ち出し仕上げの外壁は、モックアップを作成して、型枠に用いる杉板の幅やコンクリート表面に塗布する撥水剤の色合いなどを検討しました。安全面では、既存病棟を

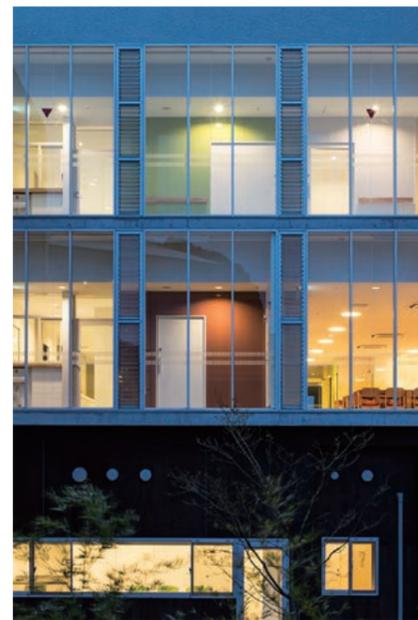
使用しながらの工事でしたので、工事車両の動線と病院利用者の動線を明確に分離して、第三者災害の防止に努めました。

歴史と格式のあるBCS賞を受賞できたことを大変光栄に思っています。

本工事に対する建築主、設計者のご理解とご協力に心より御礼申し上げますとともに、本工事に携わった協力業者の皆様のご尽力に深く感謝申し上げます。



株式会社奥村組
九州支店
建築部 課長
今村篤司
Atsushi Imamura



スタッフステーション外観。病棟を結ぶ。



病室。森に開かれ、快適な日常生活の場が確保されている。

【選考委員】
木下庸子・佐野吉彦・栗山茂樹

通りからのアプローチを利用して病院の新しい顔をつくることにも成功しているが、同時に東側大通りから既存病棟と西側既存道路へと抜ける地下サービストンネルも新設しており、将来への工事計画も見据えた対応も盛り込まれている。工事に際しては、段階的な区分けによる効果的かつ効率的な施工手順計画が、急傾斜という難条件を克服するには必須であったと考える。快適な建築空間が治療に果たす役割と共に、これからの病院建築のプロトタイプとして評価に値する建築である。

計画概要

建築主：医療法人社団 翠会

設計者：(有)富永謙・フォルムシステム設計研究所

施工者：(株)奥村組

所在地：福岡県北九州市八幡西区里中3-12-12
竣工日：平成26年2月28日

敷地面積：45,578㎡
建築面積：3,999㎡
延床面積：11,102㎡

階数：地上3階、地下1階、塔屋1階
構造：鉄筋コンクリート造